

自立した教員育成を目指して：英語教育・国際理解の観点から

著者	田中 陽三
雑誌名	甲南大学教職教育センター年報・研究報告書
巻	2018年度
ページ	49-54
発行年	2019-03-31
URL	http://doi.org/10.14990/00003334

自立した教員育成を目指して

－英語教育・国際理解の観点から－

A Message to Foster an Independent Young Teacher

－ From the Perspective of English Education / International Understanding －

田中 陽三[※]

TANAKA Yozo

要旨

「兵庫が育むところ豊かで自立した人づくり」は『第2期ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）』にある基本理念であり、予測困難な未来社会において自立的に生きる力を育てようとしている。しかし、人材育成に携わる教員の側に「自立」という意識を持って教育活動にいそしむ教員がどれほど育っているのだろうか。自立した教員とはどのような教員であるのか。筆者は、英語教育に携わる若手教員に向けて以下の4つの提案をし、筆者の教育実践経験を基に考察したい。①全体を見渡した俯瞰的な観点から英語教育を進める、②自立のための振り返り（自己評価）を大切にする、③自立のためには自らの想像力を発揮した教育活動を行う、④自らのアイディアで教材・教具を工夫する

“WE SUPPORT OUR CHILDREN TO BECOME INDEPENDENT AND RICH in SPIRIT” is the fundamental principle based on “Hyogo Educational Promotion Plan—Second Stage.” This is trying to foster the children’s ability to live independently in an unpredictable future society. However, how many teachers involved in human resource development are carrying out their educational activities with the awareness of their ‘independence’? What is an independent teacher like? The following message should be shared with promising young teachers engaged in English education. ①To promote English education from the bird’s eye view overlooking the whole. ②To cherish looking back at themselves (self-evaluation) for independence. ③To do educational activities using their own imagination for independence. ④To devise teaching materials and teaching tools by making the most of their own creative ideas. I will reexamine these suggestions based on my long and precious teaching experiences in secondary and tertiary education.

キーワード：俯瞰的、バトンの受け渡し、自立、想像力、ポートフォリオ

はじめに

筆者は教員として、小学校・中学校・高等学校・大学と40数年間教育に携わってきた。その間、ニュージーランドでは中等学校で日本語教師として1年間、

フランスでは私学の在外教育施設で管理職として、また英語教員として3年間にわたり働く機会を得た。兵庫県教育委員会の指導主事、教育事務所長、県立高等学校の校長として、英語教育・国際理解

※甲南大学教職教育センター 教職指導員

教育に関わり、今、大学で教員を目指す学生に関わる仕事をする中で得たことから、日本の学校教育を検証してみるに至った。

1 児童生徒と教員との関わり

(1) 生徒一人ひとりの教育課程は繋がっている

一人ひとりの教育は、就学前教育から始まり、小学校、中学校、高校、大学と16年間以上にわたって続く。一人の教員が関わる期間は、3年から6年間であるが、児童生徒にとっては教えてくれる人は変わっても常に学び続けている。それ故、教員は担当する児童生徒（以後、対象生徒と呼ぶ）に合った授業をしようとするれば、対象生徒がどのような授業を受けてきたかを遡って知っておくことが大切である。また、今、教えている対象生徒が次のステージでどのようなことを学ぶのかを念頭に置いて授業することを忘れてはならない。対象生徒が小・中・高でどのような教科書で学び、どのようなことを学んできたかに関心を持ち、調査し、意識して日々の授業（教育活動）に臨み、対象生徒たちを連続した俯瞰的な視点で見ることによって様々なことが見えてくる。対象生徒の今を現在完了的に捉えれば、担当教員として何を、どうすれば良いのかが自ずと分かってくる。それには使用してきた教科書から調査するのが早道である。日本の検定教科書は学習指導要領に基づいて作られており、学年齢に応じ、システムティックに構成されているので、様々なことが見えてくる。教員にとって“教育は生徒を介して行われるパトンの受け渡しである”と言えよう。

(2) テストづくりと検定教科書について

筆者は高校教員時代、兵庫県教育研究会英語部に所属し、問題作成委員（以後、問作委員）として多くテストづくりに関わってきた。例を挙げると、ヒアリング・メジャメント・テスト、県下一斉模試、アチーブメント・テスト（事務局長を兼ねていた）などであるが、現在は大規模なデータを持つ業者模試に押され、いずれも残っていないのが残念である。これらの問題作成をするに当

たっては中学校の英語教科書をよく調べた。例えば、どの語彙がどの教科書に何学年で新出であるか、どの文法項目をどの課で学ぶべきかなどである。当該試験を行う時にはそれぞれが既習の事項であるという厳密さが問われるのであり、それらを外していると教育現場からのクレームが待っている。その最たるものが、後に県教育委員会指導主事として高校入試学力検査の問題づくりに当たった時である。これらの問作にはかなりの時間と労力を要したが、それ以上に得たものは多く、学校現場では勿論のこと、現在も役立っている。当然、人間関係の面でも多くの人材と知己を得た。

また、A市の教育委員長をしていた時、小・中学校で使用する教科書選定に関わった。義務教育諸学校で使用する教科書は一括して市町村教育委員会単位で選ぶので、A市の公立小・中学校では全て同じ教科書を使うことになる。全ての検定教科書を実際手に取ってみると、若い頃、学校現場や問作で見てきた教科書に比べて、扱われている題材が新鮮で、バランス良く纏められていることが分かる。特に、掲載された写真や資料を効果的に多く使用することにより、生徒の興味・関心を引き出す工夫が随所に凝らされていることに驚かされる。今、学校現場で日々奮闘している教員や将来教員を目指す学生には、是非、教科書を生かし、系統的な視点でそれらの利用法を工夫して欲しい。そうすることで教員としての力量が増すものと確信している。何をいつ教えるかについては、カリキュラムの全体像が見えなければ、散逸的になってしまい、多くの効果は望めまい。つまり、“今、何を教え、何を教えないか”の選択が日々の授業にも欠かせない。

一方、高校で扱う教科書は各学校の教員が選定し、学校からの申請を受けて当該教育委員会が承認する形になっている。使用する教科書が対象生徒にとって適切であるかどうかは多方面から慎重に検討し、使用方法の授業改善を図るべきである。時には、別の教科書にチャレンジし、自身の知識や教材観を広げ、指導技量の向上を図ることは、教員としての大切な資質である。この際、チーム

として教科書研究することは、多忙な時間活用の上からも効果的である。また、筆者の経験から述べると、特に、高校に入学してきた新入生への教科指導において、夏までの移行期間では教える内容をスモールステップに設置し、丁寧に指導することが英語嫌いや落ちこぼれを少なくするのに有効である。

2 英語教員の自己評価をいかにこなうか

生徒にとって評価が大切なと同様に教員にとっても実践したことに對して振り返り、修正を加えたうえで、新たなチャレンジをすることが生涯学習の観点から言っても欠かせない。対象生徒に教員評価をさせるという方法もあるが、中学生による厳密な教員評価には課題が多い。そこで、教員自身による自己評価が適切であろう。評価は実践に對し、その成果をチェックし、それを次にどう反映していくかであって、いわゆるplan→do→check→actionのPDCAサイクルに位置づけられる。そのなかで‘check’に際して、使われる代表的なものの一つがCan-doリストである。そこで、一例を挙げると、EPOSTL（ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ）の195項目から成る自己評価記述文を翻訳し、それらをもとに、日本人の言語環境にも適用可能なように開発されたJ-POSTL（「言語教師のポートフォリオ」JACET教育問題研究会編）を利用しては如何であろう。この180項目のCan-do記述文を使い、定期的に自己評価し、それに、ドシエと呼ばれる学習・実践記録集に国内外の研修会への参加、検定試験受験の結果などを記録し、自己評価記録としてポートフォリオの形で残す。そして、適宜、振り返りの資料に資することにより授業改善を図り、持続的な教育活動の向上に利用することは、教員の研修意欲を高め、自立にも繋がると筆者は考える。生徒の姿勢を変えようとすれば、まず、教員自身が姿勢を変えることが求められる。併せて、自己の殻に閉じこもることなく、教員のライフ・ステージに応じて、新たな刺激を求めてチャレンジし、教員として視野を広げてゆくことも大切である。筆者はこの点を海外派

遣や文部省（当時）主催の高等学校英語教育指導者講座（中央研修）に求めた。

3 海外の学校教育を通して見た異文化理解

未来に向かって自立して育っていく子供たちの育成に大きく関わる教員には、様々な資質が求められる。とりわけ柔軟な発想と寛容な姿勢が大切であると考えられる。ここでは筆者が海外の学校で出会ったいくつかの体験を紹介する。①②はニュージーランド、③④⑤はフランスで出会ったものである。

①ニュージーランドでのユニークな資金集め（fund-raising）

オークランド市にあるタカプナ・グラマースクールに派遣されていた時、日本語を学ぶ生徒達をジャパンツアーに連れて行くための旅費を捻出することになった。教員、保護者が金を出し合って古い家を購入し、その家を自分たちで協力してリフォームして高く売った利益を、参加する生徒、保護者、引率教員の旅費に充当する計画である。リフォームに参加した労働日数により、参加者の旅費が減額される。生徒たちは旅費の全額を保護者に頼るのではなく、引率する大人たちとの労働による稼いで旅費の幾分かを補てんするのである。この過程を通して生徒たちの自立心が培われたと筆者は考える。

②Mufti Day

自由な服装での登校が許される特別な日である。チャリティーへの寄付金を募る係の生徒が校門で待っており、制服以外の服装で登校してきた生徒は寄付金を払うことになっている。勿論、寄付金を払いたくない生徒は制服で登校すればよいわけで、あくまで制服で登校するか、しないかは個々の生徒の自己判断による。また、その日に制服であるセーターを着て来て寄付をし、チャリティーを盛り上げる教員がいたのは注目に値する。

③子どもにとっての哲学

フランス人にとって、哲学は身近で、自分で興味あるものを見つけ、その存在について考え

を巡らし、答えを出す思考サイクルの習慣化であると思う。「ソフィーの世界」(Jostein Gaarder, 1995)という本が世界的なベストセラーになったことがある。その本の中で「ケーキ屋はなぜ五十個もの同じクッキーを焼けるのか？」という問に対する子供の気づきを待つという一節がある。そう言えば、筆者の住んでいたトゥレーヌ地方は緯度が高いため、夏至の頃は午後11時頃まで外は明るく、田舎道で家族が散歩を楽しんでいる光景をよく目にした。大人たちは話をしながらのんびりと歩いており、子供や犬は先を行ったり、遅れたりしていた。時折、子供はしゃがみ込んで何かを観察しており、終わるとまた大人に追いつく。子供は虫の死骸か何かを心ゆくまで観察しているのだ。この観察、想像から何かを学んでいるのである。大人は子供の気づきを待ち、子供が聞いてきた時だけ教えるのである。つまり、子供の自発的な思考の習慣を根気よく根付かせるのである。果たして日本の大人たちはどうだろうか。特に、親は子供の自発的に考える習慣の定着を待てずに、すぐに答えを教えてしまいがちなのではあるまいか。また、学校現場においても同様なことが行われているのではないか。このようなことでは、日本の子供たちには考える力が育ちにくい。今こそ教育の場においても“教えない、待つ教育”が必要ではないか。これから教壇に立とうと考えている人、すでに学校で教えている若手教員にはこの点をよく考えて貰いたい。個性を育てるには、子供の自発的な興味・関心を大切にすする大人の姿勢が重要であり、大人に我慢と時間が必要であると思う。

④ファッションセンス

筆者が勤めていた在外教育施設の生徒たちには、現地にある老人介護施設や村のフェスタに招かれ、阿波踊り、和太鼓演奏などの日本文化を披露する機会がしばしばあった。ある老人介護施設を訪問した時のことである。日本の子供たちが来るというので、お年寄りたちは飛びっきりのオシャレをして出迎えてくれた。女性は

薄化粧をし、綺麗な色の服を着て、首にはスカーフを巻いていた。男性はこざっぱりとしたブレザーにオシャレなシャツ姿でいかにもゲストを迎えるのをそれぞれが楽しんでいるように見えた。つまり、フランスの老人たちは何歳になっても個人としての誇りとファッションを楽しむことを忘れないようにも思える。それにしても日本の多くのお年寄りたちは服装一つにしても何と没個性的なのだろうか。平均寿命がフランス人より少し高い日本人は、もっと老後の人生を楽しむ術を幼い時より身につけると良いと思う。

⑤職業体験

筆者が勤めていた在外教育施設では、地元の商店主の協力を得て、生徒に職業体験をさせることにより、キャリア意識を高めるとともに、その体験を有効に使う工夫がなされていた。勿論、これらの職業体験への参加は、授業日数として学校に認められ、時には数週間に及ぶ場合があるらしい。元々フランスには、このような職業体験プログラムが中等教育(スタージュ制度と呼ばれる)ではごく普通に行われている。さしずめ日本版「トライやる・ウィーク」だが、歴史は古く、日本版のようにひと学年が一斉に出かけるというよりは一人もしくは数人が一緒に行くというものであり、将来の職業に直接繋がるケースが結構あるとのことである。特に筆者の印象に残ったのは、美容室とレストランでの職業体験である。フランスでは様々な人種の人々が暮らしており、毛髪の色、肌の色が多様である。そのため個々の客に応じた対応が求められる。特に、染髪には細心の注意とケアが必要であり、毛染めには薬品を使用するため、化学的知識が必要である。職業体験の生徒が化学式に四苦八苦していた姿が印象に残っている。レストランでは、生徒は野菜の切り方やジャガイモの皮むきを教わった。帰国してから実際に料理人になった生徒がいたことを思うと、体験と言うより研修と呼んだ方が相応しいかも知れない。一例ではあるが、このようにして生徒た

ちは自立の道への準備を着々と進めるのである。筆者はこれら外国で見聞きした体験からこれらの国の人々の生き方、考え方には、「自立する」という発想が日本と比べて強いのではないかと考える。

4 自立した教員の育成

「自立」を広辞苑で引くと、「他の援助や支配を受けず、自分の力で判断したり身を立てたりすること。ひとりだち。」とある。自立した生徒を育てるには教員自身が自立し、日々の教育活動で実践することが大切であると考え。生徒の自主性、主体性、協働性などを引き出すため、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業が推進されている。その成果については多くの実践事例が発表されているので、ここでは触れないが、教員自身には日々の教育活動において、自ら考え、実践し、振り返り、さらに高みを目指して挑戦するという所謂plan→do→check→actionのPDCAサイクルに則った取り組みが必要であろう。その際、つぎの点を踏まえて自らに目を向けては如何か。

- ① 自己分析を行ない、自分自身を知ることができているか。
- ② 教員は自らが教えることを楽しめなければ教え方が伸びない。教えること、学ぶことを自ら実践するのが良い。「時間がない」では理由にならないことを自覚すること。
- ③ 次の教育を担う人物を教えることで自分の思いを実現できるかもしれない。教える喜びを教員自身が日々の教育実践の中で意識すること。
- ④ 書くことで考える。話すことでプロダクションする。教員は自己研鑽し続ける恵まれた職業であることを認識すること。ポートフォリオの形で残しておき、必要に応じて振り返り、自己啓発に努めること。
- ⑤ 日々、小さな工夫を考え続け、授業の中で実践し、その結果どのようなことを自ら感じたかを書き留め、次に繋げてゆく。つまり、自ら、更なる未知のことへと好奇心をかりたてること。

5 筆者の提案

筆者がニュージーランドに派遣されていた時(1982年)、国際交流基金から日本語教師としてオセアニアに派遣されていた早稲田大学の永保澄雄先生という知己を得た。先生が現地の日本語教師・生徒に日本語を教える際に用いていた強力なビジュアル・エイズがイラストである。簡潔でユーモアのある略画は手間を取らず、それでいて的確に教育手段としての役目を果たしていたのには大いに驚かされ、影響をうけた。現在も筆者は永保先生を真似て使用させていただいている【図、54ページ参照】。授業において絵を使って生徒たちの興味や想像を引き出すことは、手軽で経費のかからない強力な手段である。とかく市販の、高価で画一化されたピクチャーやチャートに慣れ、それらを使いがちな若手教員は是非、与えられた出来合いの教具から抜け出し、自らの手で作り出したオリジナルで場所、時を選ばず使用できるイラストを描く力を身に付けてはどうだろう。新任教員の授業を見学した際、市販の地図やフラッシュカードを使用していた。さらに調べてみると、教科書会社や出版社からこの類の教具・教材が多々販売されており、学校現場の若手教員が何の疑問もなく使用しているのには驚かされる。この状況が若手教員の想像力、オリジナリティーを生み出す機会を阻害しているのではないか。生徒の想造力を引き出し、個性を伸ばす教育を実践するには、教員自身が市販教材に頼り過ぎず、自らオリジナリティーを育て、生かせる教員にならなければならない。その一助として、教育委員会には、イラストを描く技能や自作の教具・教材づくりを目的とする教員研修会を積極的に開催することを提案したい。

終わりに

AIの進展によりこれからの学校教育はどのように進むのであろうか。なかでも外国語教育は大きく様変わりするかもしれない。音声と映像を駆使した語学教材が、個々の生徒に膨大なデータから作り出されたプログラムを提供し、クラスという集団の場での授業から個々の生徒への教育に代わっ

ていくのだろうか。おりしも2020年から小学校で教科としての英語教育が完全実施になる。また、大学入試センター試験が「大学入学共通テスト」に替わり、その中で民間テストが採用されると聞く。つまり経済界の要望に応じて、使える英語、コミュニケーションの手段としての英語教育が一層求められる傾向にある。この状況の下、自由な発想から生み出される力こそが、AIの時代と言われる世の中を生き抜く原動力になるのではあるまいか。この点で、想像力を持った人間の育成は喫緊の課題であり、その可否は教育という学校現場に負うところが大きい。まさに教員一人ひとりの姿勢が問われる時代になっており、想像力を持った人材の育成には、想像力豊かな自立した教員が欠かせない。「人間は風にそよぐ弱い葦である、しかし、考える葦である。」というパスカルの言葉が改めて思い出される。“**教員が変われば、授業が変わり、生徒が変わる。**”

- 4) ヨースタイン・ゴルデル著 須田朗 監修/ 池田香代子 訳「ソフィーの世界」1995年 日本放送協会 108p.
- 5) 新村出 編「広辞苑」第七版2018年 岩波書店 1485p.
- 6) 永保澄雄 著「絵で描いて教える日本語」1995年 創拓社出版
- 7) 浜口博文「識者インタビュー②」『総合教育技術』2018年11月号 小学館



【図】永保先生のイラストを筆者が模写したもの。
図中の語句を絵で説明。

参考文献：

- 1) 第2期ひょうご教育創造プラン(兵庫県教育基本計画)」2014年 兵庫県
- 2) “Education in Hyogo 2018” 2018年 兵庫県教育委員会
- 3) 神保尚武 監修/ 酒井志延 他3名 編集「成長のための省察ツール言語教師のポートフォリオ[現職英語教師編]」2014年JACET教育問題研究会